



写真-1 西宮大橋から西宮マリーナを撮影（令和6年10月）

■ 古い歴史を持つ西宮マリーナ

写真-1 は、西宮大橋（写真-2）から洗戎川（あらいひすがわ）河口の西宮マリーナ（旧・西宮ヨットハーバー）を撮ったもので、左手に見える社叢林が住吉神社です。また、右手奥に洗戎川の河口に設けられた防潮水門および排水機場が見えます。

西宮マリーナは、昭和 20（1945）年、西宮港の一角にできました。昭和 37（1962）年 5 月 12 日に当時 23 歳だった堀江謙一青年が、小型ヨット「マーメイド号」で、94 日間かけて西宮～サンフランシスコ間 8,700km の太平洋単独無寄港横断航海に成功しましたが、彼が出港したのが西宮マリーナです。

昭和 46（1971）年、西宮港港湾整備工事が着工され、桁下クリアランス 16m の西宮大橋が架けられることとなります。

しかし、当時、西宮マリーナを母港とする関西ヨットクラブ会員の所有する大型ヨットが西宮大橋をくぐれなくなるため、クラブから県と西宮市に対し、西宮の埋立地（現・西宮浜）の沖に新ヨットハーバーを確保するよう誓願書が提出されます。県のヨットハーバー計画予定地は依然として芦屋沖のまま、西宮大橋が竣工します。



写真-2 西宮大橋

この頃、ようやく県は誓願を受け入れ、西宮の埋立地沖に新ヨットハーバーを確保する計画に変更しました。この計画は、リゾートホテルやテニスコート、コンドミニウムなどを併設した一大リゾートシティ構想へと発展しますが、バブル景気崩壊に加えて、阪神・淡路大震災被災者向けの住宅確保が急務となり同構想は消滅、新西宮ヨットハーバーを西宮の埋立地内の南西部（現在地）に確保することになり、平成 7（1995）年 10 月に完成しました。

また洗戎川の防潮水門および排水機場は、高潮発生時に洗戎川の流水を海へ排出するための施設で、平成 27 (2015) 年に完成しています。

なお、西宮港は、昭和 44 (1969) 年に重要港湾尼崎港、地方港湾西宮港および 56 条港湾芦屋港を統合して設立された重要港湾・尼崎西宮芦屋港 (尼崎港区、西宮港区および芦屋港区の 3 港区で構成されている) の一部です。

■ 西宮湊の歴史～風待ち湊の機能を持つ湊を整備する

住吉神社 (写真-3) は西宮神社の境外社 (神社の境外に祀ってある神社で、本社管理に属す) で、境内には江戸時代、西宮湊を守るため防波堤を築いた當舎屋金兵衛の顕彰碑と説明板 (写真-4) が立っています。

江戸時代、西宮湊は洗戎川の河口付近にあり、夙川河口から流れ出る土砂が堆積し、航路・泊地の埋没が起こるといった問題があり、加えて、兵庫と大坂の間に適当な風待ち湊がないことも問題となっていました。

寛政 12 (1800) 年、西宮で米穀商を営んでいた當舎屋金兵衛が大坂奉行所に西宮浦の築港願いを出し、波風と土砂流入を避けるために洗戎川河口の右岸側から沖に向けて 600 間 (≒ 1,090m) の防波堤 (築洲：右下の絵図参照) の築造を計画します。以後の経緯は右の説明板のとおりです。



写真-3 住吉神社

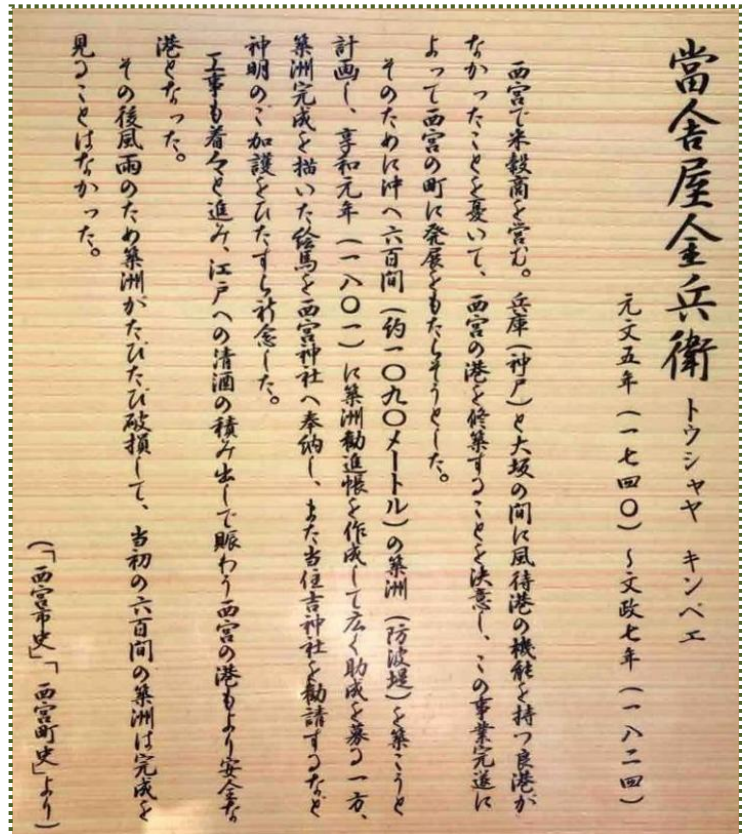


写真-4 住吉神社にある當舎屋金兵衛の説明文



写真-5 「史蹟 當舎屋金兵衛港湾修築碑」



写真-6 摂州西宮築洲略絵図

防波堤築造工事は難工事であったことから、金兵衛は工事の成就を祈念して、文化 2（1805）年に住吉大神を勧請しました。当初はもう少し浜の先に祀られていましたが、明治 2（1869）年に現在の地に遷座されています。

住吉神社の南にある東西方向の 4 本の路地を見ると、微高地が住吉神社から南の方へ続いているのが確認でき、これが金兵衛の築いた防波堤の跡かと思われます。

写真-6 の絵図（レプリカ）は、写真- 4 の説明板に記載のとおり、金兵衛が防波堤の完成予想図を描いて西宮神社に奉納した絵馬の一部です。その絵図において、沖の方へ伸びる石積みの構造物が築造予定の防波堤で、その右手の浜が「御前ノ浜」、左手の水路が洗戎川です。そして、洗戎川河口の左手が西宮湊です。

また、平成 17（2005）年 7 月には御鎮座 200 年を記念して境内整備事業が行われ、「史蹟 當舎屋金兵衛港灣修築碑」と刻まれた石碑が設置されました（写真-5）。



図-1 西宮港周辺の地図

■ 新酒を江戸に届ける公式の海運レース～命がけの「新酒番船」

江戸では、「新走（あらばり）」と呼ばれるまだ麴の香りが抜け切れていないような搾りたての新酒が好まれていました。そのため、西宮と大坂の廻船問屋は、新酒を積んで江戸までの到着を競い合っていました。樽廻船は船荷のほとんどを占める酒樽を四斗樽に統一するといった工夫を行い、従来の菱垣廻船に比べて荷の積み込み時間を大幅に短縮するなど酒造家間のタイムレースは激しさを増していきます。

享保 12（1727）年晩秋、大幅に伸びる需要に対応し、また無理な販売競争を排除する目的もあって、江戸に新酒を届ける公式の海運レース「新酒番船」が始まります。大坂の安治川（伝法）と西宮から出帆したのが最初で、安永元（1772）年には公認された大坂 8 艘、西宮 6 艘の樽廻船が両方の港を同時刻に出発しています。

そして、文化 2（1805）年からはすべての樽廻船が西宮から出発するのが恒例となります。なお、「新酒番船」は西宮沖からスタート（西宮湊および今津湊は、浅くて樽廻船が入港できなかった）しますが、今津湊がそのスタートに関わったこともあるそうです。

江戸に一番乗りを果たした酒は 1 年間特別に高い値で取引され、その船は「惣一番船」として 1 年間優先的に荷役ができるという制度で、これが江戸っ子に受け、錦絵にも描かれるほど大人気の行事となりました。

文化 2 (1805) 年以降の場合、西宮では「新酒番船」当日の朝、14 艘の樽廻船が西宮湊の沖に並びます。水主 (かこ) たちは合図とともに行司から切手 (切符手形) を受け取り、伝馬船で一斉に沖の樽廻船に向かいます。切手を受け取った船は、直ちにイカリを揚げ、大きな帆を上げて、その帆に風を孕ませ太平洋へ向けて次々と出帆していきます。

通常の樽廻船の航行は紀伊半島を回ると鳥羽などの風待ち湊に寄り、天候の改善を待ちながら江戸を目指します。しかし、新酒番船は一刻も早い到着が酒屋、廻船問屋、船頭などの関係者に大きな富をもたらすことから、沖合の黒潮の速い流れを目指して船を操ります。この頃の樽廻船は、船型の改良により安定性の向上が図られたことで、従来の地乗り (沿岸航法) から沖乗り (ただし、磁石以外は勘と経験に頼った) への転換がなされていたようです。それでも危険と隣り合わせの過酷なレースであることに変わりはありませんが。

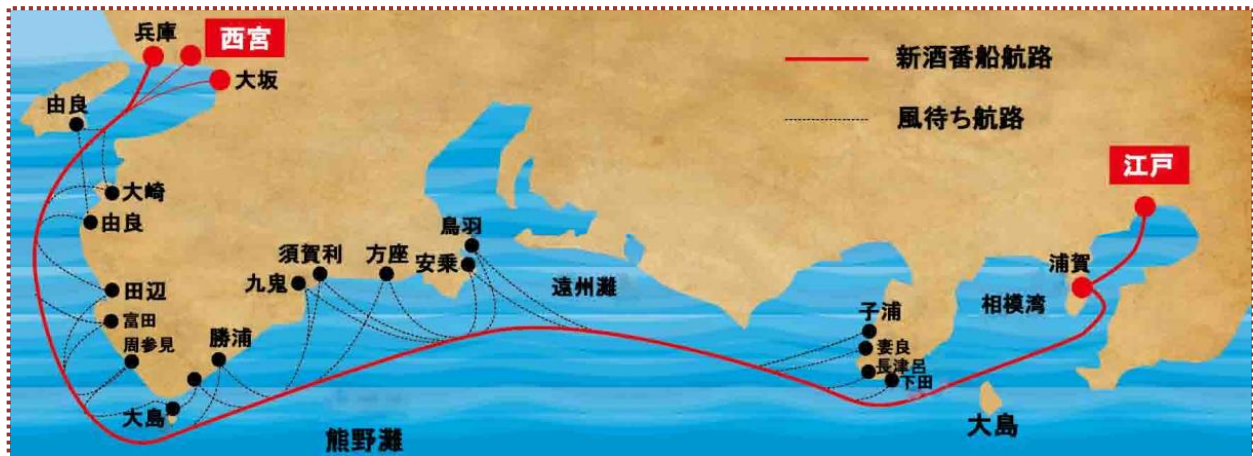


図-2 新酒番船航路図 (にしのみや【ウブスナ】vol.3-5 から引用・加工)

江戸への到着は早ければ3~4日で、丸2日という記録も残っています。品川沖に到着した船からは直ちに伝馬船が降ろされ、新川※1を上って行き、川端の酒問屋 (さかといや) に切手を差し出してゴールとなります。

一番の栄冠を勝ち取った船頭はじめ水主 (かこ) たちは「惣一番」の幟 (のぼり) を立て、太鼓をたたいて酒問屋が並ぶ新川・新堀界隈を踊りながら練りまわったとか。

新酒は、直ちに酒問屋の行司や関係者が利き酒を行い、新酒の出来柄や立値段を決めます。早いほど価値が上がるので酒蔵も真剣です。番船の到着順位や値段が決まると直ちに早飛脚が大坂・西宮へ出発、江戸~大坂間を6日で走り抜けたとか。

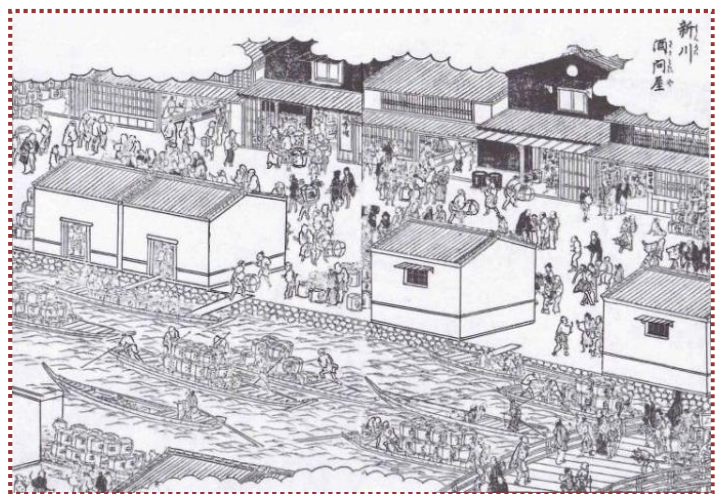


図-3 「新川 酒問屋」(『江戸名所図会 2巻』から引用・加工)

図-3 の図会に描かれている船は伝馬船で、酒問屋の蔵に横付けできる便利な小船です。品川沖で樽廻船から酒樽を積み替えて、新川を上ってきたところです。酒問屋はこの図会のタイトルにあるように新川に集中していました。酒樽はここから仲買業者を経て江戸市中の酒屋に出回ることになります。

※1 新川：江戸時代、諸国から船で江戸へ運び込まれる物資の陸揚げのために、万治 3 (1660) 年、豪商河村瑞賢により開削された。延長約 600m。新川には多くの酒問屋 (さかといや) が軒を連ねていたそうで、一説に江戸の酒問屋の 1/3 が新川に集約していたと言われるほどであった。昭和 23 (1948) 年に埋め立てられた。その新川跡には、『新川之跡』碑が建てられている。



写真-7 『新川之跡』碑

■ モノローグ

『ひょうご水百景』No.214で「今津港」を取り上げて「西宮港」を取り上げないのは「片手落ち」になるということに気がついて、急遽令和6(2024)年10月の天気の良い日に西宮港や関連施設の写真撮影を兼ねて現地調査に行きました。今回は、珍しく写真撮影および現地調査は1回で済みました。ヤレヤレ！

ただ、少し気になるのは、西宮郷と今津郷の酒は両港で樽廻船に積み込まれましたが、西郷や御影郷、魚崎郷の酒はどこの港で積み込まれたのでしょうか。

ヤノネボンテンカ (矢の根梵天花)

アオイ科ヤノネボンテンカ属の多年草または常緑の亜低木で南アメリカ原産。葉が矢尻のような形で、花が同じアオイ科のボンテンカに似ているところからこの名がある。8～10月頃、葉腋から細く長い花柄を出し、5弁花を咲かせる。高さ0.5～2m、葉長3～10cm、花径50～60mm。直立し、細い茎がよく分枝し、こんもりと広がる。葉はやや光沢があり、矛形で、波状の低い鋸歯があり、葉柄があり、互生する。花は白～淡桃色で、中心部が暗紅色。花弁裏側には赤色の脈が入る一日花。強健で栽培容易で、日本では道端などによく見られる。



写真-7 御前ノ浜の東端に咲いていたヤノネボンテンカ

【参考資料】

- 1 『住吉神社(西宮神社境外末社)』 「西宮流」西宮ペディア 2022年1月
<https://nishinomiya-style.jp/glossary/sumiyoshi-shrinenishinomiya>
- 2 『歴史秘話にしのみや【ウブスナ】～西宮港発 江戸行き 下り酒』 一般社団法人にしのみや観光協会
<https://nishinomiya-kanko.jp/ubusuna3/ub3-05>
- 3 『酒都西宮と新酒番船』 西宮市HP 2022年10月
<https://www.nishi.or.jp/bunka/rekishitobunkazai/mukashipphoto/shinshubansen.html>
- 4 『歴史を歩く#5～酒問屋で賑わいをみせた江戸の新川の今と昔』 TABINOVA 2020年8月
<https://tabinova.org/2020/08/29/for-learn-18/>
- 5 『「江戸名所図会 2巻」より「新川 酒問屋」』 東京都立図書館
https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/O/edo/tokyo_library/modal/index.html?d=5665
- 6 『西宮港・今津港』 関西の公共事業・土木遺産探訪HP
http://dobokuisan.starfree.jp/51_nishinomiya-imadu/nishinomiya-imadu.html
- 7 『植物写真鑑～ヤノネボンテンカ』 2015年12月
https://zoezoe.biz/2010_syokubutu/ka_0_a/105_aoi/pavonia/yanone_bonten.html
- 8 『堀江謙一、新西宮ヨットハーバー、切手、弁才船』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和7(2025)年4月 『ひょうご水百景』No.220

改訂：令和8(2026)年8月 『ひょうご水百景』No.220